

10月22日オープンミーティングの記録

日時 2022年10月22日の15:00~16:30

内容 ハワイのワイキキ小学校の実践紹介—以下の論文の紹介を通して

Cultivating and nurturing a positive school culture and climate: Impacts of Philosophy for Children Hawai'i at Waikiki Elementary School by Jianhui Zhang & Amber Strong Makaiau

ポジティブな学校文化と校風の啓発と育成：ハワイ・ワイキキ小学校での子どものための哲学の影響

発表者 梶形公也 大阪教育大学・武庫川女子大学 名誉教授

参加者 一般参加者6名、運営委員4名、合計10名

発表内容はPowerPointのファイルを参照してください。

議論およびQ&A

Q：ハワイの最良なものとしてのアロハと p4c が出会うことで、p4c が地域に根づいたという趣旨のことだったと思うが、地域とは学校を超えてのものと考えていいのか。

A：日本でも学校、特に小学校が地域と共に存在していたし、今でもそういう学校はある。地域が学校を支えていた。そういう中で、その学校へ子どもを通わせたいとなれば、学校だけでなく、地域もそういう肯定的な評価を受けていると考えられる。特にハワイの場合は色々な民族の人たちが多様な形で生活している。そういう中で、一つの共同体を作っていくということは大変なことだと思う。ワイキキではそのような共同体のコアが p4cHI であるという自覚がある。

Q：ビューランダ小学校にしてもワイキキ小学校にしても、どうしてこのような共同体ができてきたのか、どう思われますか。

Q：学校で P4C をすることに関して、困っていることなどはありますか。

Q：心の習慣とはどういうことか。

A：心の習慣というのは、専門用語としてあるけれど、ワイキキ小学校ではアーサー・コスタ博士の提唱した Habits of Mind のことで、彼が提唱する心の習慣には 16 の良い習慣があります。ワイキキ小学校ではそれらの「心の習慣」を教室に掲示して、日常的に学んでいます。心の習慣を身につけた結果として成績がよくなったということです¹。

¹ 以下を参照してください。 <https://madamefigaro.jp/culture/210810-waikiki-16.html> 及び「Habits of Mind」Arthur Costa, <https://www.habitsofmindinstitute.org/wp-content/uploads/2018/10/HabitsofTheMindChartv2.pdf>. また、The Institute for Habits of Mind については <https://www.habitsofmindinstitute.org/> を参照してください。

Q：テーマはやはり児童から出たものの方がいいのか。教師も決められるのか。こだわりはないか。

A：P4C の基本的な型としては、絵本などのテキストを読んで、子どもたちにそのテキストを読んだ時に不思議に思ったり、疑問に思ったりしたことを問う。子どもの発言から問いを作っていく、いくつかの問いができた時に、今日はどの問いについて話し合おうかと子どもたちに聞いて、その問いを決める。複数ある場合は、普通は多数決で決める。決まった問で話をしていく。問いは子どもたちが出し、子どもたちが出した問いを議論する。

A：子どもに問う力を育てていくことが大事で、教師がお膳立てをして、こういう問いだったら話しやすいのではないかと、というようなことはあまり考えない方がいい。

C：道徳の授業の場合、教材が同じでも、クラスによって展開が異なる。その子となった議論の方向をある程度予測しておくのが教材研究ではないかと思っている。テーマや内容についての理解を教師は持っていますが、それを出すのではなく、生徒の意見が出てくる過程で、この議論ならこちらの方向に行くかなという思いでファシリテートしている。発言できないようであれば、ノートに書いてもらっている。その際、教師も発言内容を書いて、生徒が見て参考できるようにしている。

Q：日本の学校でもコミュニティの形成ということは重視している。P4C でねらうコミュニティが日本で重視しているコミュニティとは違うという視点があると、こういう利点があるということで説得力も出るのではないかと。リップマンの言うように、思考力の育成という点に焦点を当てていかないと、P4C の良さが伝わらないのではないかと。とするなら、どういう部分に焦点を当てて実践していくのがいいか。

A：学級経営は日本では大切にされている。日本でも P4C 的な実践をしてきた教師はいると思う。林竹次や生活綴方教育はそうだと思う。子どもたちがお互いに直接語り合うということは、現在は難しくなっているのではないかと。直接話し合っ、先ほどのハワイのアロハの精神ではないけど、お互い理解し合うことは大切なことではないか。

A：学級経営の手法は教師主導のものであって、子どもの思いを受けとめていない場合があるのではないかと。

A：今日の報告では、子どもと教師が真正な関係ということが言われていたが、その真正な関係はどのような風に見えるのか。それはまさに思考力を大切にしている点にあるのではないかと。p4cHI のツールキットを見た場合、それを使うということには、子どもと教師の対等な関係を生む。「なぜ？」という問いは、子どもにも教師にも問われるもの。思考力ということに関しては、子どもの方がはるかに柔軟ではないだろうか。議論の中でお互いに認め合うということが教室を一つの共同体にしていく。これは、みんな仲良くということとは違うこと。

A：例えば、議論の過程で反論が出て場合、以前であれば、反論された子は腹を立てる場合が多かったが、今ではむしろ、議論が深まっていくという形で受け止めるようになった。

Q：話せない、書けないという子をどのようにフォローしていったらいいのか。P4C を楽

しんでやりたいと思っているのに、苦しいとか嫌だなとかになって欲しくないと思っている。

A：なかなか話せない子が、ほんのわずか話ってくれた時、みんなに聞いてもらえてとても嬉しかったと言っていた。寡黙な子が受け入れられているということが伝わるのが大切な。

A：クラスに 5 人くらいは寡黙な子がいる。順番に当たってくることも嫌、みんなの前でしゃべるのが嫌、書くのも何となく嫌という感じ。それでも、みんなの話は聞いているし、うなずいてもいる。しかし、なぜその子がそうなっているのか、何か阻害しているものがあると考えたので、グループワークの時にそのこのグループの所に行って、その子に気づいたことあるとか、今隣の子が言ったことに対してどう思うと聞いてあげると、「私も同じこと思う」と言ったりするので、「どういうこと思う」と聞いて、自分の言葉で言ってもらおう。そして、それでいいんだよと応えてあげる。周りの子と意見が違うことがあるとすごく不安、前に出て言ったときに、「えっ」と思われるのに不安がある。そういう場合でも、グループの意見を言ってもらった時に、こういう意見もあったよと紹介して、その子に話してもらおうと、話してくれる。すると、みんなこの子は話ができるんだとびっくりする。今この場で書くことはできないが、家で書いてくることはできる。書いている時に誰かに見られるというのを気にしている。このような時には、今提出しなくてもいいけど、明日は必ず提出してねと言うと、書いてきてくれる。こういう状況があると、嬉しかったとか、安心できたといった感想を書いてくれる。

文責 榊形公也